

信州大学における GPA 制度の導入に関する研究報告

西 垣 順 子

はじめに

教育システム研究開発センターカリキュラム応用設計研究開発分野では、「信州大学に適した GPA 制度のあり方に関する研究」として、信州大学において GPA 制度を導入することの是非についての検討を行ってきた。その中間報告は昨年度の教育システム研究開発センター紀要において発表されている（山本，2002）。本稿ではその中間報告も踏まえて、今年度に新たに収集したデータの検討を加えた上で、信州大学における GPA 制度の導入に関する研究結果を報告する。

1. GPA 制度とは

GPA は Grade Point Average の略語である。ある学生が履修登録している授業で取得した成績をすべて合計し、その学生の履修登録授業科目数で割り算して算出される数値であり、学業成績の平均値である。

厳密な成績評価の実施に関する議論と同時に持ち出されることの多い話題であるためか、昨年度の本センター紀要で山本（2002）が指摘しているように、厳密な成績評価と GPA 制度を同義で用いているような議論もある。しかし、決して同じものではない。ひとつひとつの授業における成績評価が甘いものであるなら、当然 GPA も甘いものになるわけであるから、GPA を導入することが厳密な成績評価の実施であると考えるのは、全くの誤解である。昨今の高等教育制度の改革に関する議論の中でも、また信州大学がその教育理念を確実に実現するためにも、厳密な成績評価を行うことは非常に重要である。だからこそ、このような安直な誤解が一部にあることは憂慮すべき問題である。

2. 本学における GPA 使用の現状

本学においてはすでに GPA 制度が学部ごとに導入されているところがある。詳しくは山本（2002）が報告しているが、授業料免除や奨学金貸与の資格者を決定するための資料として使用されている。

このような実情の中で、現在問題になっているのは、① GPA 制度を上記の目的以外にも使用するべきかどうか、②全学的に統一して導入するべきかどうか、の2点であると考えられる。次節以降ではこの2点について検討を行う。

3. GPA の利用方法

3.1. 教育における評価—教育評価と選抜

本来、教育評価は教育される者、大学で言えば学生を、育てるために行うものである。そ

こには大きく2つの役割がある。ひとつは学生の成績などを調査し、学生の授業理解の実態などを把握して、それ以降の授業内容や方法を決定するための資料を得るためというものである。授業開始時に、学生の既有知識や興味・関心を問うために実施されるテストやアンケートがこれにあたる。もうひとつの役割は、学生に対して学習すべき内容や学習速度の目安を与えるというものである。中等教育において行われる定期テストの実施目的には、教育評価のこの役割も含まれている。

これらの2つの役割はいずれも、教員と学生の双方に教育・学習活動を進める上での情報やデータを提供するものであり、学生の学びを奨励したり、援助したりすることを目的としている。

その一方で、成績評価は学生の選抜という役割も現実的に持っている。この役割が顕著に現れるのは入学試験である。またGPAを授業料免除や奨学金貸与資格者の選定に使用するというのも、選抜のための成績評価のひとつである。

3.2. 選抜方法としてのGPAの利用可能性

厳密な成績評価を実施すべきとの議論と平行してGPA制度が議論の俎上にのぼるときには、GPA制度を学生の選抜に利用するという方向での議論が多いように思われる。これはGPAがその性格上、学年末やsemester末の成績評価が出たあとに算出されるものであるため、進行中の教育活動に役立てるための資料としては活用しづらいということもあるかもしれない。

授業料免除や奨学金貸与の資格者選抜のためのGPAの利用は、学生に対するインセンティブを与えるためのものであり、実際に本学でも利用されている。

それとは別にGPAの選抜目的利用のひとつとして話題にのぼることのある方法は、いわゆる「退学勧告制度」である。ただし、退学勧告制度を導入することと、GPA制度を全学的に実施することは同じことではなく、両者は区別して議論されるべきものである。退学勧告制度を導入するとしても、被勧告者を決定する方法はGPAでなくてもよいわけである。実際に学生の学力はひとつの数値で表現できるほど単純なものではない。GPAのみでは見落とされてしまうことはあまりにも多いと言わざるを得ない。退学勧告という学生の一生を左右する重大事項を勧告する上では、GPAは参考資料のひとつにはできるかもしれないが、GPAだけを基準とすることは、厳に慎むべきである。

なお、学生を学業に動機づけるための方法に関してはさまざまな研究があるが、罰による方法は消極的な学習態度を引き起こしやすく、必要最低限のうわべ上のことだけをしておくという形骸的な学習が行われる可能性が高いというのは、教育心理学では一般的に知られている事実である(e.g., 市川, 1995)。つまり、退学勧告のようなペナルティによって学生を学業に動機づける方法は、大学全体の学業に対する志気の向上にはつながらないと考えられる。

3.3. 教育活動に役立てる評価としてのGPAの利用可能性

GPAはsemester終了後に算出される成績指標であるために、現在進行中の教育活動の参考資料としては使いづらいということを前項で述べた。しかし考え方を変えれば、教育活

動は学生が在籍している4年間（または6年間）を通じて行われるものであり、ひとつの Semester 末に得られた成績指標を次の Semester の教育活動の資料をすることは可能である。

そこで筆者は、平成14年9月に本学の8学部と医療技術短期大学部（現在は医学部保健学科）に対して、GPA を教育活動のための資料として利用できる可能性について調査を行った。

調査の目的は次の2点であった。

- ① 学生個人ごとの全般的な成績を学部としてどのように把握しているのかを調査すること
- ② GPA を学生に対する教育指導の資料として利用できる可能性に関して調査すること

3.3.1. 学部に対する調査の方法と項目

<調査方法>

8月に調査用紙を学部長宛に郵送した。学部において担当者が記入して、9月15日までに返送された。

<調査項目>

調査項目は以下のIからVIのとおりであった。

- I. 学部名を記入してください。
- II. 個々の学生の成績全般を、どなたが把握しておられますか。当てはまるものの番号を○で囲んでください。「5. その他」の場合は（ ）内に具体的にご記入ください。
 - 1. クラス担任
 - 2. 学生が所属する研究室やゼミの指導教官
 - 3. 各学部の学務委員（教務委員）・学生委員
 - 4. 特に担当者はいない
 - 5. その他（ ）
- III. 個々の学生の成績全般をどのようにして把握していますか。当てはまるものの番号を○で囲んでください。「4. その他」の場合は（ ）内に具体的にご記入ください。
 - 1. 学生の成績表をチェックしている
 - 2. 日ごろの授業態度や学習研究活動状況からの推測に頼っている
 - 3. 特に把握していない
 - 4. その他（ ）
- IV. 成績が著しく不振、または長期欠席のために、留年の可能性が高いと思われる学生が発見されたとき、誰がどのような対処をしておられますか。できるだけ詳しくお書きください。
- V. 1年次生の共通教育の履修状況に関して、共通教育センターが各学生の Semester ごとの GPA を算出して学部へ報告した場合、学部における学生の教育指導に役に立ちますか。当てはまる番号に○をつけてください。またその理由を下の空欄に書いてください。
 - 1. 大いに役立つ 2. 役立つこともある 3. あまり役立たない 4. 全く役立たない
 (理由)
- VI. 2年次以降の学生の成績について、各学部において GPA 制度を導入した場合、学生

の履修状況の把握および教育指導に役立つデータとなるとと思いますか。当てはまる番号に○をつけてください。またその理由を下の空欄に書いてください。

1. 大いに役立つ 2. 役立つこともある 3. あまり役立たない 4. 全く役立たない

(理由)

3.3.2. 学部からの回答

学生の成績把握の実態に関する調査の回答を、表1に示した。

学部・学科による違いはあるが、全体として理系学部では、教官同士で情報交換を行うなどのきめ細かな成績の把握が行われたり、まず注意勧告を行って改善が見られなければ進路変更を含む指導を行うといった制度を整備したりして、比較的体系的な指導が行われているようである。また成績不振の状況を保証人・保護者に連絡するという回答も理系学部で多かった。理系学部には文科系学部よりも、学生の学力不足の問題が深刻、もしくは顕著で目立ちやすいことと関連があるのかもしれない。

GPA 制度を教育活動資料として利用する可能性に関する調査の回答を、表2に示した。1年次生の共通教育での導入に関する評価のほうが2年次以降での導入よりも積極的であった。共通教育での履修状況は学部では把握しにくいからという回答が見られた。

また繊維学部では実際に履修指導にGPAが使用されており、成績不振者のピックアップのための有効性が確認されているようである。ただし、GPAの導入に前向きな学部でも、GPA以外のより詳細なデータも必要としていることが伺える。また、あまり役立たないと回答した学部では、少人数での指導を行っているため、GPAを算出してもいまだメリットが無いことをその理由としている。GPAは学業平均値というかなり大雑把な指標であるため、すでにきめ細かな指導が行われている場合は、それを上回って役に立つような指標ではないと考えられる。

表1. 学生の成績把握の実態に関する学部からの回答

< II. 学生の成績を誰が把握しているか >	
人文	学務委員（教務委員）・学生委員
教育	1年次はクラス担任、それ以外は研究室やゼミの指導教官
経済	学務委員（教務委員）・学生委員。ただし就学指導を必要とする学生のみ
理学	1-3年生はクラス担任と教務委員。4年生は指導教官。 教室会議において成績不振者の情報交換をしている学科もある
医学	学務委員（教務委員）・学生委員
工学	学科ごとに学務委員や補導教官などが対応
農学	学務委員（教務委員）・学生委員
繊維	クラス担任と学務委員（教務委員）・学生委員
医短	学科ごとに成績会議を開き、構成員全員が履修状況を確認している

< 次のページにつづく >

<III. 成績把握の方法>

人文教育	成績表をチェック 各学期、学生が履修届けの承認を求めに来る際に、指導教官が成績の把握をしている場合が多い
経済	特に把握していない
理学	成績表のチェック と 日ごろの授業態度、学習活動状況からの推測
医学	学士試験の結果など
工学	成績データをチェック
農学	成績表をチェック
繊維	成績表をチェック。成績表は学務係から学生に配布されていたが、今後、学科の担当教官があらかじめチェックし、配布時に必要に応じて指導を行う方式に移行する
医短	学科ごとの成績会議にて把握している

<IV. 成績不振、長期欠席者への対処>

人文教育	学務委員会が当該学生が所属する分野の指導教官あるいはクラス担任に指導を依頼 指導教官の裁量に任されている
経済	学生委員が面接指導
理学	学科によって異なるが、おおむねは、教務委員、担任、学科主任が本人と面談する。 場合によっては保証人と連絡をとる
医学	欠席が目立つ学生は、同じ学年を担当する講座間で情報交換される。小テストの成績などで成績不振が著しい学生は情報交換され、教務委員長に報告される。必要に応じて厚生委員会にかけられ、クラス担任を通じて指導を行う
工学	補導教官などが保護者に連絡するなど。学科ごとに対応している
農学	学務委員が学生に連絡ととり、面談して事情を聞く。学生に努力を促すが、学業が続けられない場合は休学、退学の相談も行う。学生の意識を高めるために退学勧告制度も検討している
繊維	指導は年々厳しくなっている。クラス担任が本人を呼び出し、成績不振の理由を聴取し、適切と思われる助言を行い、次の学期終了時に改善が見られない場合は退学勧告を含む進路変更の強い指導を行う学科もある。学生全員の成績表を保護者に送付し、成績不振者については注意を喚起し、厳しい指導をするよう依頼している学科が複数ある。
医短	基本的に、担任が個別に対応している

表2. GPA を教育指導の資料として利用できる可能性に関する調査の回答

V. 共通教育における GPA の算出と学部への通知に関して

回答	学部	理由
大いに役立つ	医学	前期必修単位を落とした学生はその時点で留年が決定するため指導が必要となる。従来は学生の自己申告に頼るところがあったため、共通教育センターから報告があると役立つ。ただし速やかに行われる必要がある

	工学 繊維	成績と同時期に GPA の報告があれば、就学指導に役立つ GPA は履修状況に問題のある学生を一目で把握できる有効な指標である
役立つこともある	人文 経済 理学 医短	教育指導のひとつの目安となりうる 履修指導に役立つため 1年生は学部の講義を受講する機会が少ないので、目が届かない場合がある。総取得単位数、出席状況など細かなデータも必要である。 1年生は専門科目が少なく履修状況が把握しにくいので、GPA のような指標があれば参考になる
あまり役立たない	教育 農学	比較的少数の学生数からなる専攻ごとの教育指導体制であり、しかも専攻の特徴が著しく異なるので、他専攻の学生との成績比較に意味があると思われないから 取得単位数、学会必要科目の指定があり、全体の平均値はあまり役立たない。学科ごとの学生数はそれほど多人数ではなく、個別な科目の評価をみることは労力を要しない

VI. 2 年次生以降での GPA 算出に関して

回答	学部	理由
大いに役立つ	工学 繊維	就学指導上の参考になる GPA は成績不振者をピックアップするという観点からは非常に有効である。しかし、中位以上の学生の指導に役立つかは大いに疑問である。
役立つこともある	人文 経済 医学 医短	教育指導のひとつの目安となりうる 学生の履修指導に役立つため できれば Semester 途中で把握したいが、GPA では難しいので大いには役立たない ひとつの指標にはなると思うが、科目間格差が大きい場合には個別の確認指導が必要と思われる
あまり役立たない	教育 理学 農学	比較的少数の学生数からなる専攻ごとの教育指導体制であり、しかも専攻の特徴が著しく異なるので、他専攻の学生との成績比較に意味があると思われないから 学部における受講が多く、日常的な把握が可能であるため。しかし、成績不振者の大雑把な把握には役立つと思われる 取得単位数、学会必要科目の指定があり、全体の平均値はあまり役立たない。学科ごとの学生数はそれほど多人数ではなく、個別な科目の評価をみることは労力を要しない

3.3.3 調査結果のまとめ

学部によって多少ばらつきはあるものの、特に共通教育課程においては GPA を導入することはそれなりにメリットがあるようである。導入するには次節で述べるような問題点も存在するが、GPA の算出自体はそれほど手間のかかる作業ではない。また共通教育センターでは Semester 終了後に学生の成績を各学部へ送付しており、それらは学部での履修指導、教育指導の資料とされているはずである。その成績データに GPA の数値を載せることそれ自体には、特別問題はないだろう。

むしろ厳に慎むべきなのは、GPA のみを算出することに満足してしまうという状況であろう。ただしこれについては指導教官やクラス担任の裁量による部分があることは事実としても、実際には多くの学部で学生に対する面談指導などが行われているため、本学においてはそれほど問題ではないと考えられる。

繰り返しになるが、GPA は学生の成績を代表して表すひとつの指標に過ぎない。しかも、かなり大雑把なものである。そのため、教育活動における利用には次に示すような注意が必要である。

ひとつは、GPA はあくまで著しい成績不振を示す学生の初期抽出のひとつの手段とはなりうるが、平均的以上の学生に関してはそれほど多くの情報を提供しないということである。学業平均値という性質上、その数値は学力の精密で厳密は反映とはならないことも多い。つまり、誤差が生じる。誤差があることを考慮してもなお成績が不振であると判断できるほど、GPA が低い数値を示す場合には、その学生は確かに成績不振に陥っており、特別な履修指導を必要としているといえる。だが、平均的な学生たちに関しては、それほど厳密に彼らの学力を示す指標とはなりにくい。

もうひとつは、成績不振者に対する実際の教育指導では、よりきめ細かく個々の学生の実態を把握しようとする努力が必要とされることである。GPA というひとつの数値のみを振りかざしたところで、効果的な教育指導を行うことはできない。低い GPA 値は、自分が危機的状況にあるのだということを学生に認識させるきっかけにはなるが、その状況をどのように打開すればいいのかの指針にはならない。クラス担任や指導教官による面談などを通じて個別の学生が陥っている状況を把握した上で、必要な教育指導を行う必要がある。

さらに学生が成績不振に陥っている場合にそれを保証人に報告している学部があり、さらに共通教育での成績不振も保証人に報告してほしいという学部からの要請もあった。専門課程においては多くの学生がすでに成人に達しているわけであり、保証人（多くの場合は学生の両親）に成績を報告し、家庭指導を依頼するということには抵抗感が無いわけでもない。また、思春期を越えた年齢の青年たちが親の言うことを素直に聞くとおもうので、家庭での指導がどれほど効果を挙げるのかという疑問もある。しかしその一方で、ほとんどの日本の大学生の授業料は両親が支払っているという実情を考えると、学生の学業の実態を報告する責任は大学にもあるかもしれない。

また学生の両親と大学との関係を考える上で忘れてはならないことは、大学として教育理念をしっかりともち、それを社会に対して公表して説明しておくことである。我が子の成績が思わしくないという状態は両親にとっておもしろい状況ではない。大学の教育に対する取り組みへの不信感を招きかねない。18歳人口が減少する中、保護者からの不信を恐れて、

教育とは思えない過保護な学生サービスを行っている大学も一部に厳然として存在する。信州大学がそのような状況に陥ることを防ぐためには、教員が学生に対して行っている教育活動の根拠となる教育理念を明確にし、社会に向かって公表しておかなければならない。

4. 信州大学全体でGPA制度を導入する上での現実的問題点

本節では信州大学で全学統一的なGPA制度を導入する場合に発生する現実的な問題を取り上げる。問題は以下の3点である。

4.1. 学部による成績の出し方の違い

山本(2002)に詳しく掲載があるが、信州大学においては「優」「良」「可」「不可」を判断する基準が学部によって異なっている。全学的なGPA制度を導入することを考えるなら、この点は障害になるだろう。ただし、学部ごとに基準が多少違ってかまわないと考えるなら、問題にはならない。基準とその根拠が明確であるなら、全学で統一されなければならないという必要性はとくにない。共通教育と学部専門教育の基準が異なってしまうことが問題ではあるが、別々にGPAを算出するのであれば問題は生じない。

4.2. 順序尺度による平均値の算出という現状

他大学の状況を見ても、GPAは成績カテゴリーを数値に置き換えて平均値を算出するという方法がとられることが多い(引用文献リストを参照)。例えば「優」「良」「可」「不可」をそれぞれ3点、2点、1点、0点に対応させて、学業平均値を算出するという方法である。この方法は統計学上は誤った方法である。「優」「良」「可」「不可」というのは順序尺度である。順序尺度とは、値どうしに序列はあるが、値間の間隔が同じではない尺度のことをいう。「優」「良」「可」「不可」はこの順で評価が低くなるが、「優」と「良」の差と「良」と「可」の差は必ずしも同じではない。そして順序尺度には四則演算を適用してはいけないというのが決まりである。つまり、「優」「良」「可」「不可」に点数を当てはめて平均値を計算するというのは、統計学上は問題があるのである。

ただし、これは致命的な問題とも言い切れないところがある。仮にも心理調査の専門知識を持つものが紙面上でこのようなことを表明してもよいのかどうかは疑問だが、実際の調査や評価においては、統計学上正確なデータ収集が行われるとは限らないという現状がある。心理学の調査においても、厳密には順序尺度であるがそれを間隔尺度とみなして分析を進めることが多くある。

よって「優」「良」「可」「不可」に数値を当てはめてGPAを算出することは、正しくは無いが現実的には問題ではないとも言える。ただし、実際に導入するに当たっては、決して完全に正しい方法でも厳密な方法でもないのだということを自覚した上で、慎重に運用することが必要である。

4.3. 授業における成績評価のあり方

冒頭でも述べたが、各授業で厳密な成績評価が行われなければ、GPAは全く信用できない数値になる。つまり、厳密な成績評価を行うためには、各授業での成績評価のあり方が最

も大切なのであり、それよりも前に GPA の導入の議論がでてくるというのは不可解な話でもある。

本来、すべての授業において適正な成績評価が行われており、かつ個々の学生の成績全般を指導教官やクラス担任がしっかりと把握しているのであれば、GPA をわざわざ導入する必要などないくらいなのだ。ただし現実的には、授業料免除や奨学金貸与の資格者を決めるためにはひとつの数値指標が必要となることもあるし、多くの学生が在籍する中で、著しい成績不振者を効率的に発見するためには、GPA は便利な道具なのである。

そのため GPA を算出する価値はあると考えられるが、その際には各授業において適正な成績評価が行われなければならないということは、常に念頭においておかなければならない。

5. 結論—GPA 制度導入に関する提言

以上の議論を踏まえて、本節では信州大学での GPA 制度のあり方に関する提言を行う。

結論から先に言えば、以下の条件が満たされるのであれば、GPA を導入することにはメリットがある。また GPA は単なる足し算と割り算で計算できるものであり、導入に伴うコストは大したものではないだろう。

その条件は① GPA の数値を過剰には信用しないこと、②実際の授業での成績評価を適正に行うこと、の2点である。

授業での成績評価では、その授業の成績しか把握できないのに対して、GPA では Semester 全体を通じた成績をある程度包括的に把握する方法である。ただし、学生の学力全般をひとつの数値に表してしまうことは、多くものを捨象してしまうことを必然的に伴う。本稿を通じて繰り返し述べたことではあるが、GPA は成績評価のかなり大雑把な1指標である。このことを自覚して運用しなければ GPA のメリットを生かすことができないばかりか、学生の学びのあり方をゆがめてしまう危険すらある。

また授業での成績評価が適正なものでなければ、GPA は全く信用できない数値になる。各授業においては、授業の目的を明確にし、学生がその目的に到達しているかどうかを適切に把握できる評価方法を用いて、成績を算出しなければならない。このことは常に念頭に置いた上で、GPA を導入する必要がある。

また GPA 制度を導入する際には、共通教育課程については共通教育センターにおいて学生の GPA を計算した上で、現在 Semester 末に配布している成績表に記載するのが妥当であろう。そしてその成績表を学部へ送り、クラス担任が学生の成績の状況を把握できるようにすべきである。学部専門教育については、学部ごとに GPA のメリットがあるかどうか異なっているため、学部の裁量に任せるのが適当と考える。ただし、何らかの方法で指導教官やクラス担任が学生の成績を把握していることが前提である。

引用文献

市川伸一 1995 学習と教育の心理学—現代心理学入門 3 岩波書店

上智大学学事部学務課 2001 大学院生の皆さんへ 大学院 新成績評価制度について

Retrieved October 24, 2002, from

http://www.sophia.ac.jp/acad.nsf/J/gakumu__news__0202__inseiseki?OpenDocument

香川大学経済学部 GPA (グレード・ポイント・アベレージ) Retrieved October 24, 2002, from <http://www.ec.kagawa-u.ac.jp/~senkyou/policy/GPA.html>

絹川正吉 「ICUの教育はどのように行われた—成績評価とは何か—」 Retrieved October 24, 2002, from <http://www.okayama-u.ac.jp/user/st/nyushika/gakusyuu/ou-voice3/lecture2.html>

山本英二 2002 信州大学教育システム研究開発センター紀要